



一般社団法人つなぎのチラシ

>>> 社会

警察官だから必要だと思った「認知症当事者の お迎えサービス」

「行ってきます」から「ただいま」
までをサポートします

「タクシーにらせて
帰らせてください」

「つなぎ」は京都府警のOBが運営する一般社団法人で、京都を中心に、認知症当事者とそのご家族に対するサポートサービスをご提供しています。主なサービス内容は、「見守りカメラ」と「見守りシール」そして「お迎えサービス」です。

「見守りカメラ」は室内に設置されたカメラがセンサーと連動していて、認知症であるご本人の動きに反応するとご家族のスマホに通知が届くシステムです。「見守りシール」には、「つなぎ」の電話番号とご本人の個人ID番号が記載されています。洗濯可能なので、洋服や下着に貼っておけば、外出先でご本人が受け答えできない状況でも、連絡を受けた「つなぎ」が必要な情報をお伝えします。もし、警察に保護されて、ご家族がお迎えに行けないような場合でも、ご家族に代わって警察等までお迎えにあげます。これが、「つなぎ」の主な事業となります。

皆さんは、認知症の方が警察に保護されたあと、どうなるかご存じでしょうか？

なんて言うと、少し驚かせてしまうかもしれませんね。警察に保護されたあとは、警察からご家族等に連絡をして迎えに来ていただきます。ただ、保護が数回続くと、ご家族から「タクシーにらせて帰らせてください」とか「夕方まで預かってください」と言われることもしばしば。そのようなご対応も、お仕事をされていたり、遠方にお住まいだと仕方がないこともかもしれません。

警察にお迎えに来ていただくのは家族に限るといきまはあります。ですから、警察官だった頃の私は、困った時、ケアマネジャー（介護支援専門員。略称はケアマネ）さんや介護ヘルパーさんに連絡をしてお迎えに来ていただいたり、パトカーでご自宅までお送りしてケアマネさんにバトンタッチする、ということもありました。



一般社団法人つなぎ
代表理事
中邨 よし子

○[なかむら・よしこ] 昭和59年4月京都府警察官を拝命。39年間勤め上げ、令和5年3月定年退職。退職を機に一般社団法人つなぎを立ち上げ、認知症当事者のお迎え等のサービスを展開中。認知症当事者等が安心して外出できる町（ネットワーク）の実現を目指している。
ホームページ <https://kyoto-tunagi.com>

でも、ケアマネさん達にとって、それは本来業務ではないので、個人の良心として動いてもらうことになります。その時に、もし、事故が起こってしまったら、ケアマネさん達に責任を負わせてしまうことになりかねません。警察も同じです。保護したあと、ご家族や関係機関に連絡するところまでは法律で決まっていますが、その先には何のルールもありません。ですから、ケアマネさんなどみんなが良心で動いてくれているのに、事故が発生すれば、その良心を踏みこじることになりかねないのです。

そこで私は「お迎えサービスがないものか？」とネットで調べてみましたが、お話し相手になつたり一緒にお料理を作るサービスはあっても、「警察へ迎えに行きます」というサービスはありませんでした。「それなら、自分でやるか」と定年退職を機に、法人を立ち上げることにしたのです。

利用料金をいただくのは「悪」か？



「高齢者110番のいえ」の旗

私は「つなぎ」の事業を始めてから、認知症の方と接触する機会が増えました。それまでは自分自身、認知症に対する知識がほとんど無かったので、本を読んだり、当事者の方のお話を聞くなどして、認知症について学びました。そこでわかったのは、「今までの知識は間違っていた！」ということでした。「認知症になったら、何もわからなくなる」「や」「あてもなく徘徊する」という根拠の無い情報を信じ込み、「認知症

不便だけれど、不幸ではない

「つなぎ」のサポートサービスは有料です。介護保険が適用されたり、ボランティア精神で活動されている方が多い介護業界で、利用料金をいただく、と言うと「えっ？」と驚かれることがあります。さらに金額をお伝えすると「年金生活者はどうするの？」と尋ねられます。でも、仕方がないのです。行政と違って、団体も企業と同様、運営にはお金がかかります。人が動けば人件費が発生します。事務所の家賃等ランニングコストも必要です。無料でサービスを提供することもできませんが、それでは半年も維持できません。事業を継続して定着させるためには、やはり利用料金をいただくしかないのです。当初はいろいろ迷いましたが、契約いただいたご家族から、「家族のことですからお金は惜しみません」と言っていたいた時に、少し救われた気がしました。

「怖い病気」この世の終わり」くらい深刻に受け取っていたのです。

でも、事実は違いました。症状が進行すれば「何もわからなくなったりする」こともあるようですが、いきなりそんな状態になるわけではありません。周囲のサポートがあれば、一人暮らしも可能です。もちろん、お勤めされている方もいます。それなのに、間違ったネガティブイメージのせいで、ご家族が認知症だということを、周囲に隠したり、恥ずかしいと思ってしまう方が少なくありません。認知症治療の第一人者と言われた故長谷川和夫先生は、「認知症になったことは不便だけれど、不幸ではありません」とおっしゃっていました。そう、不幸なんかじゃないんです。

広がれ！

「高齢者110番のいえ」

全国キャラバン・メイト連絡協議会では、認知症サポーター養成講座で講師を務める「キャラバン・メイト」を養成しています。私もキャラバン・メイトとなり、認知症サポーター養成講座を通して、「認知症を正しく知ってもらうこと」を広めています。さらに、「つなぎ」では、認知症当事者や高齢の方に安心して外出してもらうため、京都に「高齢者110番のいえ」という安心スポットを作るという取り組みを、今夏よりスタートさせました。

皆さんの地域に「こども110番のいえ」

はありますか？「こども110番のいえ」とは、子どもたちが危険を感じた時、助けを求めて駆け込める場所です。「高齢者110番のいえ」は、まさに、その高齢者版です。

「つなぎ」のサポートサービスを利用された、あるお散歩好きの認知症当事者の方が、道に迷って保護された時に、ご家族は警察官から「安全なところを散歩してもらってくださいね」と言われたそうです。「危ないから散歩なんかさせるな」と言われると思っておられたご家族は、「散歩を続けさせてもいいんや」と安堵した半面「安全なところって、どこ？」と思われたとのことでした。その話を聞いた時、私は「高齢者110番のいえ」という安心スポットを作ろう！」と思い立ったのです。

民間主導のため予算はありません。ゼロスタートです。でも、趣旨に賛同してくださる企業や個人の皆さんとともに、目印となる「旗」を作りました。この旗を事業所やご自宅の前に立てていただきます。

「高齢者110番のいえ」は高齢者の方が外出中、しんどくなったり、困った時に立ち寄るとサポートしていただける場所です。そのような安心スポットがあれば、出かけるご本人も、送り出すご家族も、安心できると思いませんか？ ぜひ、皆さんの地域にも広がってほしいと思います。超高齢社会を迎えたこの国で、認知症になっても「行つてらっしゃい」と「ただいま」をずっとと言える家庭と地域であるために。